

義兄に身体を書き換えられた、ある妹の告白。

雨の日は家族に隠れお兄ちゃん専用のメスとしてとろとろ絶頂させられる。
1
お母さんには、一生内緒。

プロローグ

第一章 境界線

第二章 狂い出す歯車

第三章 戻れなくなる私

第四章 刻印

エピローグ。

プロローグ

高校の卒業式を間近に控えた、ある日の夜のことに、私は、いつものように、母さんと二人だけで質素な食卓を囲んでいた。

けど、母さんの様子が少しだけおかしかった。母さんが、ぼそりと話をする。

「……ねえ。高校も終わったから、言うんだけどね」

箸を置き、母さんが少し照れたように、けれど決意を秘めた目で私を見た。

「うん」

「母さん、再婚しようと思うのよ」

「えっ！」

驚きで、口に運ぼうとしたお浸しが、思わず落ちそうになる。

「うっそお！」

女手一つで、私を育ててくれた母さん。仕事と家事で、自分の時間なんて、一秒もなかったはずの母さんが、第二の人生……。

「応援する！どんな相手なの？」

私の言葉に、母さんはホッとしたように顔を綻ばせた。

「大学の部屋を、あっせんしてくださった人いるでしょ？」

「ああ、優しそうなおじさん！」

「あのひとね、連絡を取り合ってたら、いつのまにかそう言うことになって」

「凄いな。お母さんも隅に置けないなあ」

私が地方の大学に合格し、部屋探しを手伝ってくれている時に知り合った、地主のおじさん。私も少し喋ったし、好印象だった記憶がある。

「だから、ごめんね。一人暮らしを楽しみにしていたんだと思うんだけど……」

あちらの家に、一緒に引っ越すことになったのよ」

「えええ！ あ、でもさ……うれしいかも。それならお母さんと一緒にいれる。実はお母さんを一人にするの、ずっと心配だったから」

「あらあら。結局、お弁当作ってほしただけじゃないの？」

「へへへ、バレた？」

都会の喧騒を離れ、自然豊かな地方へ行く事に。一人暮らしへの不安が消え、母さんの幸せを一番近くで見守れる。私はその時、心から良かったと思ってた。

その先に、私を根底から書き換える出来事が、待ち構えているとも知らずに。

第一章 境界線

駅で拾ったタクシーが、田舎道に入っていく。アスファルトの匂いが薄れ、代わりに濃い緑と、どこか湿った土の香りが鼻腔を突く。

「……ここよ。これから私たちの家になる場所」

案内されたのは、立派なんだけど閉鎖的な雰囲気を持つ古い日本家屋だった。重厚な門構え。手入れはされているが、人を寄せ付けない感じの雰囲気。

ここで、お母さんと、新しいお父さんと……暮らすのかあ……。

「……誰だ？」

でてきた彼は、不愛想という言葉では足りないほどのオーラを纏っていた。年の差は私より上、少し離れている。けれど、その身体つきは大人びていて、Tシャツ越しでも分かる逞しい胸板と、鋭い眼光。

そして、その後ろから、あのおじさんが出てきた。

「なんだい。電話くれれば迎えに行ったのに！」

「いいのよ。びっくりさせたかったんだから」

「そうか。上がって！ ほら、漣も突っ立ってないで」

「この人らが？」

「漣、新しいお母さんと、妹になる子だよ。仲良くしてあげてね」

新しいお父さんの言葉に、彼は短く「あっそ」と言った。私を一瞥した瞳は、妹を見るような温かいものではなく、ただ、そっけない感じのものだった。

「……よろしく、お願いします。漣兄さん」

私が差し出した手を、彼は無視して家の中へと消えていった。

「おい、漣！ お前もいい年なんだから……」

「仕方ないわ。突然転がり込んだのは、こっちだから」

「ちゃんと話をしてただけどなあ……」

その時、背筋に走った奇妙な戦慄。都会のマンションでは感じたことのない、檻に自分から足を踏み入れてしまったような、逃げ場のない予感。

考え……すぎよね。

「さあ。部屋はいっぱいあるんだ。君らの部屋も掃除してあるから」

そう言っ、私が連れていかれたのは、二階の一番奥の小奇麗な部屋だった。日当たりが良い部屋で、おじさんが窓をあけるとカーテンがふわりとなびく。

そこに春の風が吹き込んで、私はそつと髪の毛を押さえた。

「えっ！ 海が見えるんだ！」

つい、テンションが上がってしまう。街が一望出来て、その先に海がある。

「なんか素敵……」

私の段ボールの荷物が置いてあり、そのひとつの箱のガムテープを剥がして、中からお気に入りのぬいぐるみを出した。

「クマちゃん。新しい、お部屋だよ。ほら、海も見える」

熊のぬいぐるみを持って、海を見せてると、そこに母さんが入って来る。

「田舎で驚いたでしょ？」

「ううん。見て！ 海が見える！」

「本当だわ。風も抜けるし、気持ちいいわね」

「うん」

すると、一階からおじさん……新しいお父さんの声がする。

「晩飯にしよう！」

「はーい」

声がそろって思わず、二人で笑ってしまった。

「いこ！」

「そうね」

そして夕食は、息子を抜いた、新しいお父さんとお母さんと私だけだった。

「漣さんは？」

「出かけちゃったみたいだ。せっかく、一緒にと思ったのに」

「まあ、時間をかけて行けばいいわ」

「すまんね。男手一つで育てて来たからか、愛想と言うものを知らん」

「複雑よね。男所帯に、急に女が二人も増えたんですもの」

「まあ、そう言ってもらえると、ありがたい」

それから夕食を終え、私の部屋へと戻る。

「学校の準備しなくちゃ」

ひとつひとつ段ボールを開け始めると、ブーンと庭に車が入って来る。

「あ、帰って来た……」

私は、不愛想だけどイケメンの、義兄に興味を示していた。

「どこいったんだろ？」

窓から見れば、義理の兄はコンビニの袋をぶら下げて家の方に戻って来た。その時、チラリとこちらを見て目が合ったが、スツと視線を下げて無視された。

「はあ……、おじさんはいい人なんだけどなあ」

そうして荷物を出し、私の部屋らしく飾っていく。

トントンと階段を上がる音が聞こえたと思ったら、スツと義理が顔を出した。

「これ……置いておくぞ」

入り口に、コンビニの袋が置かれる。

「あ、なに？」

何も言わずに、義兄は自分の部屋に行ってしまった。

「なんだろう？」

すると、袋にはいくつかのコンビニスイーツが入っていたのだった。

「えっ。えっ。美味しそう！ もらっていいのかな？」

私はそれを持って、義兄の部屋へと行った。

コンコン！

「あの、これ、もらっていいんですか？」

カチャ。

義兄が顔を出して、めんどくさそうに言う。

「嫌いじゃなきゃな」

「だ、大好きです！ プリンケーキパフェとホイップ生どら焼き！」

「なら、よかった」

「ルイボステイも好きです」

「ちよつと、コンビニまでは遠いからな。なんか買う時は言え」

「ありがとうございます。あの……」

パタン！

言い終わる前に、いきなり締められてしまった。でも悪い人ではないみたい。
私は、階段を降りてお母さんにそれを言いに行く。

「あら。よかったわね」

「かあさんにも」

「いいのよ。あなたがもらったんだから」

「ありがとう」

私はそのまま部屋に戻り、夜景を見ながら生どらを堪能した。

「おいし……」

食べ終わって、部屋をかたづけていると、お母さんが来て言う。

「お風呂、一番最初にどうぞって」

「はい」

そして私は、着替えを持ってぱたぱたと階段を降り、お風呂場に向かった。

電気、点いてる？

何も考えずカラカラとドアあけると、そこには上半身裸の義兄がいた。

「あつ！ ごめんなさい！」

「別に。汗かいたから、洗濯もんに放り込んでおいた」

「お風呂って言われて」

「ああ。どうぞ」

そう言つて、義兄は出ていった。

凄い筋肉……腹筋バツキバキだった……。

思わずその肉体美に見とれてしまった私。高校の時、彼氏っぽいのはいた。だけど、あんな体つきの人を見るのは初めてだった。

「スポーツ……やってるのかな……」

そして思う。

義兄と、同じ屋根の下に暮らすという事は、境界線があいまいになる事だと。

いままでは母さんと二人暮らしだったけど、いろいろ気を使わないといけない。

部屋着を脱いで、ブラジャーを外しながら、ちよつと怖さも感じるのだった。

第二章 狂い出す齒車

お風呂上がりの脱衣所で、私は服を着る。義兄の、あの彫刻のような腹筋と、獣を思わせるしなやかな筋肉の残像が、まぶたの裏に張り付いて離れなかった。私は自室に戻り、彼からもらったプリンケーキパフェをスプーンですくった。

甘い。

都会のコンビニで何度も食べたはずの味なのに、田舎の古い家で食べると、なんだか特別に感じてしまう。まるで、旅行にでも来た気分だった。

「……優しい、人なのかな」

不愛想な態度。突き放すような物言い。それなのに、甘いスイーツをくれた。その義兄のギャップに、私は少しだけ胸をときめかせていた。

それから、一週間後。

私の大学生活が始まり、義兄との距離も少しずつ縮まっていた。といっても、会話は相変わらずそっけない。また新しいスイーツを置いていってくれたり、大学までの近道をぶっきらぼうに教えてくれたり、たまに、送ってくれたり。

けれど、何かが少しずつ、確実に変わっていった。

その始まりは、雨の降る土曜日の午後だった。母さんと新しいお父さんは、親戚の挨拶回りで隣町まで出かけていた。この広い家中がしんと静まり返り、雨音が古い屋根を叩く音だけが響く。

「なんか、静かだなあ。ま、集中できていいけど」

私は二階の自室で、大学の課題を広げていた。すると階段を上がる音がして、私の部屋のドアが開く。

ノックは……、なかった。

「あの……漣兄さん？」

入り口に立った義兄は、いつもと様子が違った。コンビニの袋も持っていない。ただ、その鋭い眼光が、まっすぐに私を射抜いている。

「……都会の男とは、もう連絡してねえのか？」

「えっ……？」

唐突な問いに、心臓が跳ねた。高校の時、仲の良かった男友達の顔が浮かぶ。でも、今はもう連絡なんて取っていない。

「取って、ないですけど……」

「……ならいい」

義兄は部屋の中に一歩、踏み込んできた。

「あの……」

部屋の鍵を閉める音が、雨音に混じって聞こえた気がして、私は息を吞む。

「漣兄さん……?」

「お前、あの日……風呂場で俺の体、見てただろ」

ドクン、と心臓が大きな音を立てた。バレてた。あの、筋肉に見惚れていた、浅ましい私の視線。でもそれは、家族になった人のものだと言い聞かせてた。

「そ、れは……ごめんなさい。凄かったから、つい」

「そうか。……なら、もっと近くで見せてやるよ」

「えっ。えっ！」

義兄が、私の机に両手をつく。逃げ場を塞がれて、私は椅子に座ったまま、彼の逞しい胸元を見上げる形になった。漂ってくるのは、濃密な男の匂い。

「……いいか。お前と俺は他人だ」

「な、にを……っ」

「親父は、お前を娘だと思ってる。でも俺は、お前を妹だなんて思ってたねえ。
……あの日、玄関で目が合った時からな」

義兄大きな手が、私の頬を包み込む。その指先が、耳たぶをじりじりと這い、
首筋へと降りてくる。いつも私に、コンビニスイーツを買ってきてくれる時の、
あの不器用な優しさはどこにもなかった。

「あ、あの……」

上目遣いに見ながらも、震えていた。でも、なぜか私は義兄に惹かれていた。
ぶっきらぼうな中にある、優しさがうれしかったから。

「……漣兄さん。あの……兄妹だから……」

「だから、俺は思ってたねえって」

「お母さんたちが帰ってきちゃう……し」

「まだ帰らねえよ。たっぷり時間はある」

その言葉が、鋭い楔となって私の胸に突き刺さる。恐怖。けど、それ以上に、彼の強引な手つきに身体が疼き始めていることに、私は戦慄を覚えていた。

新しい兄……なのに……。

でも、私も実感はなかった。いきなり身近に現れた、年上のただの男だった。歯車が狂い始め、優しくて不器用な義兄という仮面が、剥がれ落ち始める。

「なあ、お前も、俺とくつつきたいんだろ？」

「そ、そんな……」

「分かるぞ」

そう……かもしれなかった。私も一目見た時から、惹かれていた気がする。義兄の雄の匂い。逃げられない境界線の向こう側へ、引きずり込まれていく。

雨音に紛れながら、義兄は私の唇に唇を重ねてきた。

何故か……抵抗できなかった。

怖いはずなのに、なぜか……私の舌は義兄に絡めとられたのだった。

ちゅぷ。

雨音は更に激しくなり、義兄とのキスに目をつぶってしまうのだった。

第三章 戻れなくなる私

「ん、んん……っ……!!」

重なり合った唇から、熱い吐息が漏れる。舌は、私の口内を容赦なく蹂躪し、逃げ場を奪っていく。初めて知る、大人の男の強引なキス。怖いはずなのに、脳が痺れて、指先まで力が抜けていく。

怖いけど……嫌じゃなかった。ダメなのに、心地よかった。

「……嫌なら、もっと強く突き飛ばせよ」

唇が離れた瞬間、義兄が耳元で低く囁いた。その声は、甘い誘惑というより、逃げ道を塞ぐ宣告のようだ。彼の大きな手が私のＴシャツの裾から忍び込み、熱い手のひらが直接、私の胸の肌を這う。

「あ、だめ……お兄さん」

「兄貴って呼ぶな。……お前、ここ、すごい速さで脈打ってるぞ」

彼の指先が、下着越しに私の胸に触れる。高校の男友達との幼い接触とは、重みが、熱が、何もかもが違った。雨の匂いと彼の体温。狭い部屋の空気が、

一気に濃密な性の空間へと書き換えられていく。

「……母さんが、幸せになればいいと思ってたんだろ？」

私は、黙ってうなずいた。

「だったら、お前は黙って俺に抱かれてりゃいいんだよ。お前が俺に従えば、この家の平和は守られるからな」

「そんな……だめだよ……」

「お前の身体は、あの日から、俺を求めてただろ？」

パチンツ、とブラジャーのホックが外れる音が、静かな部屋に大きく響いた。

妹としての仮面が剥がされ、ただの女にされる。窓の外では雨が激しさを増し、私たちの背徳的な接触を世界から隠してくれていた。

「力を抜け」

そっと畳の上に押し倒され、脱衣所で見た筋肉は、私を組み伏せるための、力となって迫ってくる。

「……怖い……」

「痛くはないさ」

それが、私と義兄の、終わりの始まり。

母の再婚という幸せに、決して消せないドロドロの墨をこぼしてしまおう。

「でも……兄妹なのに」

「だから、俺は思ってたねえ」

そしてまた、強引に唇を塞がれる。

するとTシャツの裾から手が潜りこみ、私の乳房を覆い隠すようにした。

くにゅ。

「あっ」

「……大学生になったばかりなのに、結構、胸おっきいんだな」

「中学生のあたりから、膨らんでたから……」

くにくにと、乳房を揉まれると淡い快感が、広がっていった。

ザーツと雨音が聞こえる。

「雨……凄いな」

「ああ」

だけど、その雨の音は、ただ二人だけの世界を作り上げていた。

「どきどきする」

「分ってる。ずっとだろ」

「うん……」

物凄い背徳感の中で、私はただ従順にされるがままになった。

「見るぞ」

Tシャツの裾が挙げられ、乳房をさらけ出されて、両の乳首をつままれる。そのまま、くりくりと転がされて、ぞくぞくと肌が栗立った。

「ん……ふ」

「どうだ。義理の兄にこうされるのは？」

「変……な気分」

「だろう」

義兄は、グーっと乳首を引っ張り、更に強めにくりくりしてくる。

「あつ。だめ……」

「弱いんだな……」

「あんまり、触られたことないの……」

「じゃあ、その味を覚えろ」

つまみ上げてクリクリを続けられていると、身体がピクピクして来た。

ちゅぷ。

舌を乳首に添えられて、転がされ始める。

「ああ……」

こんな気持ちになるんだ……。

すこし、大人になった気がした。

「……はあ、あ……っ……」

舌が乳頭を転がすたびに、身体の芯がびりびりと痺れる。これはだめだつて分かっていのに、義兄が与えてくる熱は、私の身体を激しく揺さぶっていた。

「どうした。……ここ、もっと触ってほしいんだろ？」

「そんなこと……っ……！」

否定する言葉とは裏腹に、私の体が彼の手のひらを求めて小さく浮き上がる。するとさらに、義兄は指先を下へと這わせてきた。スカートの裾を捲り上げて、太ももの内側の柔らかい肌に触れる。

「あ、だめ。そこは……っ！」

「まだ、なんだな？ ……大人ってのは、こういう事だ」

彼の指がパンティ越しに、おまんこを圧迫する。雨音にかき消されるような、かすかな水音。自分でも気づかないうちに、身体は、雨に濡れる地面のように、彼を迎え入れるための準備を整え始めていたらしい。

「……親に、バレたらどうするの？」

「黙ってりや分からねえよ。それとも……全部バラしてやるか？」

意地悪な問いかけと共に、彼は私の耳たぶを甘噛みした。背筋に走る戦慄と、下腹部を突き抜けるような疼き。怖い。でも、彼に股間を触れられるたびに、

私のこれまでの普通が、彼専用の悦楽へと書き換えられていく気がした。

スツスツと、おまんこをなぞる義兄の指。

こんな事……ダメなのに。

「んっ……あ、……っ……」

「……その声だ。それでいい」

義兄は、私の反応を一つ残さず記録するように奪っていく。

くちゅー。